



地域日本語支援ニュース こだま 第 300 号

2016.7.14



『こだま』は、おかげさまで、300 号を迎えました。
2003 年の創刊から 13 年、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

====目次=====

1■ともに生きる■

「お互いの違いを認め合い、相手の文化も尊重する」 マヘーマー

2■高校進学進路ガイダンス情報（7、8 月）■

=====

1■ともに生きる■

「お互いの違いを認め合い、相手の文化も尊重する」

マヘーマー

マヘーマーさんはまだ少女のころ、母国ミャンマーで日本語に出会い、その魅力に引かれ来日して 20 年になります。その間、日本とミャンマーの架け橋として、ミャンマー語教室やミャンマーの文化紹介、在日ミャンマー人の居場所作りなど、様々な活動に日々奔走してきました。そんなマヘーマーさんだから分かった気づきや活動にかける思いを書いていただきました。

私は、1996 年に来日し、日本語学校や中央大学の商学部・商業貿易学科を経て、IT の企業や語学学校で仕事をしました。その後 2002 年 12 月から NPO 法

人日本ミャンマー・カルチャーセンター (JMCC) ※を主宰して、現在まで活動が続けています。今回、私は「日本とミャンマーの教育観」の違いや子どもたちに母語・母文化を伝えることの大切さについて述べたいと思います。

私たちミャンマー人は、ミャンマーで答えを丸暗記して試験に臨み、詰め込み教育が当たり前で、考えさせないという教育を受けてきました。日本に来て、初めて自分の意見や感想文を書き、自由に物を書けるようになりました。ミャンマーは長い間、社会主義の国で、鎖国的な政策を取り、自給自足の生活が長く、海外からの情報もシャットアウトされていました。仏教の教えや価値観を大事にし、親や先生が絶対的な存在で、目上に対して自分の意見を言えませんでした。そういった国で育った私は、日本の大学に進学し、日本人の学生と同じ土台で学業や就職活動をしなければいけませんでした。

ミャンマーでは、先生から与えられたことをこなせば、試験に合格できますし、上司に言われたことだけをやれば、出世できますが、日本ではそういきません。日本人の学生は、自分で考え、行動し、自立できるように、自分で責任を取るような教育を受けてきているので、私はハンディキャップを感じました。「日本語の壁」の問題は、もちろんのこと、日本人の考え方や文化、風習なども日本で生活しながら、徐々に克服してきました。日本に長く住んでいる今でも、私は日本人との考え方の違いを調整しながら、日々奮闘しています。

さて、私が今回、取り上げたいテーマの一つは、日本とミャンマーの「教育観の違い」です。前述の通り、ミャンマーでは、勉強というと、先生から一方的に教えてもらい、それを覚えていく、という伝統的な教育観がまだ根強いので、日本の学校での総合学習など、子供が主体になってするクリエイティブな活動のようなもの、学ぶ力を育てる、というような教育の意味が、親になかなか伝わりにくいです。

来日したばかりの子供たちは、日本の学校に通います。親は、先進国の日本の教育を高く評価し、自分たちの子供にも日本の教育を受けさせたいと強く思ったからです。しかし、ミャンマーの学校教育を途中まで受けてきた子供にとって、日本の学校生活は、とても新鮮ですが、日本語もできないので、日本人のクラスメートや担任の先生とコミュニケーションをとることができません。子供は、日本人の言葉が理解できないため、右も左も分からないまま、見よう見まねで周りの動きに合わせて、学校生活を送ることになるのです。

そこで、私は、学校側と教育委員会からの依頼を受けて、日本の学校に通うミャンマー人の子供たちに日本語指導と学校生活に馴染めるようにかつ溶け込むように指導をしに学校に行っていました。ミャンマーの子供が日本の学校生活に慣れるまで必要最低限の日本の言葉ができるまで、週に2～3回学校に行って、指導していました。

ミャンマー人の親がまず、日本の学校で驚くことは、学校で教える教科・科目や学校行事についてです。親は「日本の学校は、行事が多く、子供たちにきちんと勉強を教えていない」とがっかりします。ミャンマーの学校では、音楽の授業、家庭科、図工、図書、体育、水泳などほとんどないに等しく、例えばそのような教科があったとしても、きちんと教えていません。日本の学校行事が多いことにも、ミャンマーの親は、驚きます。親が学校に子供の様子を見に行くと、子供たちが学芸会のための練習をしていたのを見た親は、「日本の学校は、遊びばかりで、勉強していないね。」と私に不満を言います。

また、子供の身体検査などの重要さも親は理解していません。例えば、「明日は、尿検査があるから、採尿してきなさい」という担任からのお手紙を親が読んでいなかったで、子供は、自分だけ出していないから、学校で嫌な思いをするときがあると親のことを恨むようになります。学校のお知らせやプリントなどについて、親が読めないだけでなく、重要性を理解していません。プリントの中に地域のお知らせなどいろいろなものが入っていて、「どうして学校は、広告を入れてくるのだろう」と思って捨ててしまう親がいます。その結果、子供の方は、自分だけ学校にお返事などをもっていけなくて、辛い思いをし、親子の溝が深まる一方です。学校がやっていることの意味が分からない、例えば、身体検査の意義が理解できていなかったり、学芸会、運動会、音楽会等の意味やPTAやパトロールなどなど親が子供の学校のことが理解できないことばかりです。そのうちに、子供の方が日本語が上手になり、子供が自力で学業と学校生活をするようになり、親を頼らなくなり、親を馬鹿にするような子供もいます。子供は、親の思いから離れていきます。親の思う通りにならなくなり、親子の関係が壊れてしまうケースもあります。

子供たちに親の思いを伝えるために、母国語や母国の文化は大切です。ミャンマー語や文化なら親が教えればよいのに、と思う方がいるかもしれませんが、前述のような親子の溝があって、親は自分の子供に教えることが難しいという面があります。JMCCの教室にそういった親と子供が通うようになります。「ここへ来ると、子供たちは自然にミャンマー語を学びたくなる」、「ほかの子供と

いっしょに学べる」、「ミャンマーに一番近い場所」だからこそ、子供たちは素直になれるのです。

現在、JMCC では、毎週日曜日に、親の会と子供会を同時に開催し、親は、学校からもらうお手紙やプリントの内容の理解と学校生活について理解できるように勉強しています。また子供たちも親が教えられない学校の宿題や教科を JMCC で勉強しながら、ミャンマー語やミャンマーの文化を自然と学ぶようになってきています。JMCC は、2003 年から子供会を開催していますので、小学校 6 年生の時に来日した子供は、今は、日本の大学を卒業して立派な社会人になり、日本の企業に勤めています。また大学に進学している子供たちもいますし、小学校 1 年生の子供もいます。今後も JMCC は、在日ミャンマー人の子供たちと親の教育支援を続けたいと思います。そのためには、子供会を支えてくれるボランティアの存在は、大きいです。ミャンマーの子供たちや親の役に立ちたい、社会貢献したい方は、ぜひ JMCC にご連絡ください。活動をとおして、子供と親の溝が少しでも埋まり、日本社会で生きていく術を少しでも身につければいいなと思っています。

共に生きていくためには、お互いの文化、習慣、風習等の違いを知り、認め合うことが大切だと思います。同じ国の人でも育った環境、価値観や教育背景が違えば、一緒に生活するのは、難しいです。私たちは、この日本で国の違い、文化や宗教などの壁を超えて、皆仲良く過ごすことを考えなければなりません。宗教、価値観の違い、肌の色や顔立ちなどで差別を受ける方がたくさんいると思います。そういったことがないように、違いを理解できるようにすることと、お互いに認め合えるように努力をしなければなりません。そうすれば、少しでも人間関係がよくなり、摩擦が減ることになるでしょう。

※日本ミャンマーカルチャーセンター（JMCC）

<https://jmcc.jp/>
